

Macbeth における“Sleep”のイメージャリについて

英文学教室 岡 村 俊 明

OKAMURA, Toshiaki : “Sleep” Imagery in Macbeth

J. D. Wilson によるとエリザベス朝のソネット作家は“sleep”のテーマについて好んで歌っていた⁽¹⁾。実際 Sir Philip Sidney のソネット (*Astrophil and Stella* XXXIX), Edmund Spenser の *The Shepherdes Calender* (Canto 9, Stanza 40), Samuel Daniel のソネット (*Sonnets to Delia* XIV) などがそうである。また Seneca の *Hercules Furens* (11. 1065-7) や Ovid の *Metamorphoses* (XI, 11. 723-6) また Chaucer の *Squire's Tale* (1. 347) など過去の作家も“sleep”のテーマに関心を示していた。このように当時として有名なテーマを Shakespeare は彼の戯曲, 詩, ソネットで展開させ, 発展させている。特に *Macbeth* においては Shakespeare 独自の発展の傾向が顕著にあらわれている。

Macbeth における“sleep”のテーマ, そのイメージャリについては, A. C. Bradley はじめ J. D. Wilson, M. Murray, W. Clemen, R. A. Fokes, C. Spurgeon など多くの著名な批評家が指摘してきた。しかしそれを精密に研究した人は私の知るかぎりではない。この劇にしめる“sleep”のイメージャリの重要性を考えるとこのことはむしろ不思議な感じさえするのである。そこで私なりの試論を述べるのも意義があることだと思う。

まず“sleep”のイメージャリの定義を考えよう。イメージャリの定義は Caroline Spurgeon が考えているよりもっと広く, S. L. Bethell のように「比喩的に用いられると, 直接的に用いられるとを問わず, 明確な事物を指示する語もしくは句」⁽²⁾ と考える。そして“sleep”のイメージャリといえば, “sleep”, “sleepless”, “rest”, “drowsy”, “dream”なども含めて考えるべきである。それで“sleep”のイメージャリと言う場合には, 上の概念, 比喩を含んだものをひっくりめるとき, 後で分類するように下位区分された「不眠」に対立するイメージの場合の二通りある。まぎらわしいので前者を“sleep”, 後者を「ねむり」としておこう。あとでこのイメージャリの個数を計算しているが, その場合には一つの完全なセンテンスのなかに多くそのイメージが使われていても一個と数えている。

“sleep”のイメージャリは次の三点から考察されるべきであろう。

1. 個々の作品に使われているそのイメージの数について
2. そのイメージの意味上の分類と, その意味の広がり, 深さについて。同時に登場人物との関連について。
3. 作品全体にそれぞれのイメージがしめる役割および機能について。

以上の観点から考察すれば, ある作品における“sleep”のイメージャリを全体的に位置づけることができると思う。もちろん三点のうちどちらか一点が他の劇よりとびぬけているからといって, そのイメージャリが必ずしも, 効果的に使われているのではなく, 三点の相関的なものを考慮しなければならぬであろう。

では悲劇全般にわたって，“sleep” のイメージの意味上の分類をしたい。悲劇の “sleep” のすべてのイメージをカードに転記していると、それぞれの作品ではいくらか個性も違うことに気がついた。それを分類すると、その特色が明確になると思ったので試みた。

“sleep” のイメージの意味上の分類（主要なもののみ）

- | | | |
|------------|-----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| I
ねむり | (1) 平和, 安心 | We may again
Give to our tables meat, sleep to our nights
Free from feasts and banquets of bloody knives. (<i>Macbeth</i>) |
| | (2) 生命を養うもの | You lack the season of all natures; sleep. (<i>Macbeth</i>) |
| | (3) 死 | Shake off this downy sleep, death's counterfeit. (<i>Macbeth</i>) |
| | (4) 時間を浪費すること (idling away) | What is a man,
If his good and market of his time
Be but to sleep and feed? a beast, no more. (<i>Hamlet</i>) |
| | (5) 表面上の意, 深層の意なし | |
| | (6) その他 (上記には分類されない多様な意) | |
| II
不眠 | (7) disturbed sleep | In this slumbry agitation, besides her walking and
other actual performances, what, at any time, have you
heard her say? (<i>Macbeth</i>) |
| | (8) 表面上の意, 深層の意なし | |
| | (9) その他 | |
| III
その他 | (10) Wake, rise の意 | |
| | (11) 夢 (第7番目以外の) | |
| | (12) 甘美なもの | Enjoy the honey-heavy dew of slumber. (<i>Julius Caesar</i>) |
| | (13) 卑わいな意 | |
| | (14) 病 気 | |
| | (15) その他 | |

以上のことに留意しながら、Shakespeare の悲劇全般にわたってごく粗雑にたどってみる。*Romeo and Juliet* から始めよう。ここには “sleep” のイメージが27個ある。比較的多いといえる。その “dominant image” は Spurgeon 女史が指摘しているように⁽³⁾、light (sun, moon, stars, fire, lightning) である。夜などの場合には、光を光たらしめているものは、暗黒であり、それと “sleep” は関連があるので “dominant image” の末端をなしているといえよう。

ここでは「夢」に分類される “sleep” のイメージが多いのが特色である。次の例を考えよう。

Rom. O blessed, blessed night! I am afeared,
Being in night, all this is but a dream,
Too flattering-sweet to be substantial. (2. 2. 139-41) ⁽⁴⁾

彼らの恋が現実ばなれしていて、夢のようであること、結ばれたと思ったら消えてしまうという意味をもっている。

“sleep”と「死」の連結がこの劇に見られる。死んだようにねむった Juliet がおき、Romeo がそれを間違えて自ら死んでしまうこと。“like death”, “the form of death”と直喩でつながれている。後期になると、“sleep”と“death”は連想されるが、“like”とか“form”はとれてしまう。

“sleep”のイメージは個性的でなく、また新鮮なものは感じられない。次に見る通りである。

Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health!
Still-waking sleep, that is not what it is! (1.1.185-6)

これは矛盾語をならべてある事を説明するというエリザベス朝の伝統ののっとったものにすぎない⁽⁶⁾。とにかく個性化されたイメージは殆んどないといえる。

*Julius Caesar*に移ろう。これには“leading image”はないといってよい。イメージに関しては散漫としかいいようがない。“sleep”のイメージが29個あるが「表面上の意味」にしか分類されえないのが11個もあることからわかるであろう。個性的に使われていないことを示すといえよう。意味分布は *Romeo and Juliet* より広い。「時間の浪費」の意味でのイメージが使われている例がはじめてみられる。ここでの夢は *Romeo and Juliet* と違って悪夢のそれである。不眠の大きな特色といえよう。*Romeo and Juliet* に1個しかなかった不眠のイメージが多くでてきている。それは殆んど Brutus 一人に限られており、Caesar 暗殺の直前と、罪になやむ後半(4幕)にでてくるものである。眠られない Brutus のかわらで Lucius が熟睡しており、それは Brutus を羨望の気持でみたしておる。この「不眠」は *Macbeth* にもでてくるが、ここではまだ表面的であるといえよう。後期の悲劇にあるように、ある作品の後半になるにつれて、ますます“sleep”のイメージが人間の深層にはいり、個性化され、場合によっては“sleep”そのものが人格化され、その人に対決するといったものではない。ここでは Brutus の意識につれて進行してくるものはないといえよう。“sleep”のイメージは第2幕と第4幕に集中して、その他は夫々一つであるのも興味ぶかい。

では *Hamlet* に移ろう。“sleep”のイメージの数は21個ある。Spurgeon 女史が指摘しているように⁽⁶⁾ “dominant image”は病気のイメージである。しかしここには“sleep”と“sickness”の結びつきは、“sleep”の総数21個のうち1個である。特徴的なものは“death”のイメージ(5個)、「時間の空費」「不眠」のイメージであろう。特に「時間の空費」の意味は *Hamlet* のテーマと密接な関係があるといえよう。

What is a man,
If his chief good and market of his time
Be but to sleep and feed? a beast no more (4. 4. 33-35)

他に5個あるが上例ほど明確に“sleep”を「時間の空費」の意でとらえたものは Shakespeare 悲劇にはないのではないか。この劇のテーマである *Hamlet* の復讐の遅延、および不活動といったことと関連づけると面白い。次は「死」の意味との関連を見よう。この結びつきは、*Romeo and Juliet* にも一カ所でてきたが、それ以前に *Henry IV* や sonnets あとには *Macbeth* にもある。

このテーマは Shakespeare が非常に関心をもっていたものと思われる。ここでは *Romeo and Juliet* のように後から追加された感じの、又ぎこちない印象を与える “form” とか “like” などによって結ばれているのではなく、To die:to sleep とイコールの関係で結ばれている。しかも何度も繰返すことによって、その効果を強めているといえよう。それはあの有名な独白 “To be or not to be” にみられるところである (“sleep of death”)。しかも表面的にはなく、このイメージは Hamlet の心の深層にはいつてきているといえよう。彼の全存在をもって問いかけたのだ。まさしく彼にとって、生か死の問題であろう。

“sleep” のイメージは劇全体に一様に散存している。しかし意味分布は少数の項目にしかわたってなく、「時間の浪費」や「死」などの意味に集中的に使われている。個性的であるといえる。前半と後半ではイメージが違ふし、発展があるといえる。Hamlet は後半になるにつれて精神的に成長し、彼の意識も発展するが、それと関連があるといえよう。

では *Othello* に進もう。“sleep” のイメージの数は13個ある。非常に少ない。“dominant image” は “animal image” であるが、それからへだたっていることが一番大きい原因であろう。また悲劇において “sleep” のイメージを使う人間は、Brutus や Hamlet のように疑念をいだが、すぐ行動に移せなくて迷っている人間か、あるいは Macbeth のように行動のあとでも倫理的葛藤に苦しんでいる人間に多く、Othello のようにすぐ行動に移す人間には少ないのが普通である。特徴的な不眠のイメージは、嫉妬に狂いはじめた Othello をさして Iago が言うとき使われる。

Not poppy, nor mandragora,
Nor all the drowsy syrups of the world,
Shall ever medicine thee to that sweet sleep
Which thou owdst yesterday. (3. 3. 331-34)

実に個性的に使われる。

では *Macbeth* に移ろう。“sleep” のイメージは52個もある。その数は Shakespeare 全作品のうちでも圧倒的多数といえる。意味上の分類は次の通りである（本文86ページの分類を参照）。

	ねねり (32個)						不眠 (16個)				その他 (4個)			
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
数	1	5	9		6	11	15	1		4				

この表からもわかる通り分布は広い。「ねむり」のイメージが32個、「不眠」のイメージが16個、その他が4個ある。しかし我々の印象としては、*Macbeth* では「不眠」のイメージが「ねむり」よりも多いということではなかろうか。これをもっと緻密に分析してみたい。例えば *Macbeth* と *Lady Macbeth* との次に会話に注目しよう。

Lady M. You lack the season of all natures, sleep.
Macbeth. Come, we'll to sleep.

これには「ねむり」に分類されるイメージが2個あるが、そういうねむりを二人がもちたいという願望をあらわすがもっていないのが現状であるので、これは不眠を示すものになる。そんな仕方でも再分類すると、「ねむり」は19個、「不眠」は32個、その他は1個になる。即ち、表面上は「ねむり」の意味に分類されても、「不眠」のイメージを示しているものが圧倒的に多いということである。これは「ねむり」の特質を敷衍することによって、いや敷衍すればするほど、その反対の意味の「不眠」を示すということになっている。Shakespeare は他の劇では不眠になやむ人の側に熟睡している人を対比させ、その不眠を強めるというテクニックを使っている。しかし *Macbeth* ではこのような例はない。あるものと他のものとの外面的な比較ではなく、あるものなかにそれと対立する意味を内包している。不眠のイメージがこの劇全体にまんえんし（不眠になやむ人は三人もいるが）、まだイメージ自体も深化し、また登場人物の意識のなかに食いこんでいると考えられよう。大きな特色というべきであろう。他に「ねむり」のなかの第6番目の「その他」に分類されるのが11個もあること（事実上分類できないほど多様な意味をもっているが）、「ねむり」のイメージのなかで第3番目の「死」に分類されるのが9個もあること。以上が *Macbeth* における“sleep”のイメージの特色である。

ではまず「不眠」のイメージを中心に論を進めよう。劇の頭初に「不眠」は三人の魔女によって予言される。それは劇全体に暗示される。*Macbeth* はその予言を聞き、また *Lady Macbeth* の教唆によって *Duncan* 王を殺してしまう。それは王を頂点としてなりたっているヒェラルキーをこわすことであった。その中でのみ約束されている平和なねむりをこわすことにもなる。それでは *Duncan* 殺害前には、即ち秩序の世界では“sleep”はどのような意味をもっていたのか。それは「罪のない」「心配事のもつれ糸をなおしてくれる」「生を養なう」いわゆる祝福されたねむりであった。これを *Duncan* 殺害と同時に *Macbeth* は殺してしまう。「ねむり」を殺した *Macbeth* には人生観も変わってくる。彼は良心の可責のため眠られない。王冠を奪う大きな目的であった心の満足は今では得られない。*Duncan* 王殺害直後 *Macbeth* は大勢の人を欺くために次のように言うが、これは皮肉にも彼の人生を暗示することになった。

Had I but died an hour before this chance,
I had liv'd a blessed time; for, from this time instant,
There's nothing serious in mortality;
All is but toys: renown and grace is dead,
The wine of life is drawn, and the mere lees
Is left this vault to brag of. (2. 3. 98-103)

彼は次々と犯行をかさねてゆく。次の *Macbeth* 夫妻の会話に注目しよう。

Lady M. You lack the season of all natures, sleep.
Macbeth. Come, we'll to sleep. My strange and self-abuse
Is the initiate fear that wants hard use:
We are yet but young in deed. (3. 4. 141-4)

Macbeth は寝ようというわけだが、皮肉にもこれ以後“sleep”のイメージを口にしなくなる。イメージの大きな転回点というべきである。

Macbeth と *Lady Macbeth* と *Banquo* が不眠になやむが、彼等三人に共通していえること

は、その原因がまさに悪事をしようとする、あるいは悪事をしたことに対する良心の可責からきているのである。不眠は登場人物夫々の内面的葛藤、己れの倫理感との戦いであるといつてよい。なぜ不眠のイメージがこれほど多く、しかもそれが三人の倫理感と結びついているのか、そこに作者の創作の秘密があると思うが、それについては後ほど述べる。

Macbeth は後に対抗勢力 *Malcolm* によって滅ぼされ、order の世界が復元されるわけだが、この過程は “sleep” のイメージを通じてなされるのも興味ぶかい。*Duncan* を殺した *Macbeth* は「ねむり」のない世界には行っていった。従って正常な世界を再現しようとする努力には「ねむり」をこの世界にとりもどそうとするイメージが使われる。

Thither Macduff

Is gone to pray the holy king, upon his aid
To wake Northumberland, and war-like Siward:
That, by the help of these—with him above
To ratify the work—we may again
Give to our tables meat, sleep to our nights. (3. 6. 29-34)

まさに上と同じ意味のことを裏面から *Macbeth* は言う。即ち不眠になやむくらいなら、この世界が滅びてしまったらよい、即ち現在の disorder の世界が滅びて、order の世界が還ったらよいと言う。ironical な言葉だが次にかかげよう。

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,
Ere we will eat our meal in fear, and sleep
In the affliction of these terrible dreams
That shake us nightly. (3. 2. 16-19)

Malcolm は我々が殺されず安心して眠ることができる日が近いと言い (5. 4. 1-2) , しかもそう努力する。最後に *Macbeth* を滅ぼしてしまい、もとの秩序の世界に還したとき、*Malcolm* は次のように言う。この科白はこの劇での最後の科白である。*Shakespeare* のすべての悲劇がそうであるように、劇の最後の科白はその劇を評価する実に重大な手がかりを与えてくれる。

What's more to do,
Which would be planted newly with the time,
As calling home our exil'd friends abroad
That fled the snares of watchful tyranny. (5. 7. 93-96)

Malcolm は自ら王になって、忠誠をつくした家来に分に応じて思賞や称号を与えたりする決意をしている。しかしそれだけではもとの秩序の世界にはかえられない。即ち、“sleep” も同様にもとの世界にもどすことが必須の条件である。order の世界にもどす試みは、不眠の世界にたえきれなくて、又その住人にふさわしくなくて逃げた諸侯をもとの「ねむり」の世界に、order の世界につれもどすことであるといえる。

というのはこの “watchful tyranny” とは *Duncan* のことであるが、この “watchful” の意は常識的には “cunning”, “spying” の意であるが、ここではこの意味は「眠らずに起きている」「眠られい」と解釈すべきだと思う。劇の冒頭の三人の魔女の不眠の況文が、ここではじめて

Macduff は死のまがひものたるねむりではなくて、ねむりのために殺された死そのものを見よという。

Shake off this downy sleep, death's counterfeit,
And look on death itself! up, and see
That great doom's image! (2. 3. 83-85)

また Duncan は死んで墓に葬られているが、これを墓のなかでねているという (3. 2. 22)。最後に Lady Macbeth は耐えきれずにととう夢遊病者 (“sleep-walking”) になる。彼女は呪われた死者の行くところ—地獄—にいるように思っている。“Hell is murky.”これが死の意味をもったねむりのもたらす一番恐ろしいイメジではなかろうか。実際彼女は良心の可責にたえきれずに自殺する。不眠は彼女を殺したといえる。ここにも不眠と死の癒着が見られる。

この劇では他の劇と比較して “sleep” のイメジャリが多いのは既述した通りである。またそれは深さと同様に広さももっているし、とくにそのなかで「不眠」のイメジと「死」の意味をもった「ねむり」のイメジが多いのも、またこの両者のつながりもみてきた。また Macbeth, Lady Macbeth, Banquo の三人が不眠に悩むがその大きな原因はそれぞれの心のなかの倫理的葛藤であることもわかった。以上の事実を考察してそこに一貫して流れる原因とその source との関連から考察するとよいと思う。

Macbeth の source は Holinshed の *Chronicles* である⁽⁷⁾。Shakespeare は忠実に Holinshed からひいている。Holinshed が史実を間違えたところは、念入りにも Shakespeare 自身もそのまま間違えているほどである。かと思えばある点では Shakespeare は首尾一貫して意識的に Holinshed をまげている。そこでは Mackbeth も Mackbeth 夫人も Duncane に対して当然いだけ深い恨みがあり、彼を殺す当然の理由もあった。*Chronicles* でも Mackbeth は Duncane を殺すが、殺害後 Mackbeth も Mackbeth 夫人も良心の可責が全然ない。一方 Shakespeare 劇では、殺害の理由は Macbeth の野望とそれを助ける Lady Macbeth の野心という内面的なものになっており、それをめぐって Macbeth, Lady Macbeth, Banquo の三人の倫理的葛藤がある。だから Holinshed と Shakespeare の相違は外面的な歴史と内面的な悲劇の違いであるといえる。またもう一つの相違は “sleep” のイメジに関することである。*Chronicles* では以上の三人に関しては、「不眠」は勿論 “sleep” のイメジャリは全然ない。そこで “Sleep no more” の叫び声はあるが、それは Malcolme を殺した Kenneth に聞えるものである。また他に不眠のイメジはあるがそれは King Duffe のそれにすぎない。Mackbeth にもともとあったのではない。Mackbeth 夫人にも *Chronicles* には “sleep” のイメジャリはない。Shakespeare の *Macbeth* での彼女の夢遊病の場面は、Shakespeare の創作である⁽⁸⁾。また *Chronicles* では Banquho は Mackbeth の共犯者なのであって、罪を犯さないように不眠になやんで苦しむことはない。

Holinshed と Shakespeare の間には以上述べた大きい二つの相違があるわけである。推論すれば、Shakespeare が *Chronicles* にはなかった内面的葛藤の悲劇にしたが、そうしようとすればするほど、*Chronicles* には欠けていたそれを表現するものを作者は強く欲した。それを解決するものとして作者が取上げたものが、“sleep” のイメジャリではなかったか。したがって *Macbeth* のテーマ—野心とその倫理的葛藤—と “sleep” のイメジャリは不可分の関係にあるといえる。だか

ら Shakespeare は “sleep” のイメージを他の劇より遙かに広く、深く用い、登場人物の深層にまで食いこませている。*Macbeth* における “dominant image” を形成するものといえる。

我々はイメージを三点から考察するといったが、どの点でも *Macbeth* では十分であるといえる。

* この論文は44年10月25日日本英文学会中四国支部大会（第22回）において発表された。

- (1) J. D. Wilson (ed.), *Macbeth* (The New Shakespeare, 1960), p. 122.
- (2) S. L. Bethell, “Shakespeare’s Imagery,” *Shakespeare Survey* 5, 1953, p. 62.
- (3) Caroline Spurgeon, *Shakespeare’s Imagery* (Cambridge, 1965), pp. 64—5.
- (4) 使用テキストは、W. J. Craig (ed.), *The Complete Works of William Shakespeare* (Oxford, 1957) である。
- (5) Edward Dowden (ed.), *Romeo and Juliet* (Arden Shakespeare), p. 14.
- (6) Caroline Spurgeon, *Op.cit.*, pp. 133—4.
- (7) *Chronicles* では *Macbeth* の父の名は *Sinell* で the thane of Glamis. 史実では彼の父は *Finley*, the Prince of Ross である。Cf. Horace Furness Jr, *Macbeth (A New Variorum)*, 1903, p. 394.
- (8) Cf. Kenneth Muir (ed.) *Macbeth* (The Arden Shakespeare, 1955), p.xliv.

